住民の意思を無視して進められる戦争への道

沖縄・鹿児島

馬毛島の基地化問題

『馬毛島』のことを知っていますか？

馬毛島とは、種子島の西へ約10キロにある約8平方キロメートルの小さな島です。防衛省は、南西諸島における自衛隊の活動拠点兼訓練施設として、米軍訓練移転としてこの島を活用しようとしています。

県本部女性部「12・8平和集会」で、「馬毛島の現状と平和運動」と題し講演を行いました。講師からは「馬毛島への米軍施設に反対する市民・団体連絡会」立ち上げの経緯や署名活動、抗議行動などの団体の活動、基地建設計画の経緯やその影響など馬毛島の現状について様々な視点でのお話をいただきました。

2011年6月の日米安全保障協議委員会（ツー・プラス・ツー）での在日米軍の空母艦載機の訓練基地に馬毛島が浮上して以来、海上ボーリング調査、環境アセスメントの実施など、政府・防衛省は、国会審議を経ないで、当たり前のように施設整備を前提に事を進めていますが、地元では、基地建設について賛成、反対それぞれあり、市民の間で分断が生まれています。また、基地整備にあたり島の固有種であるマゲシカや漁場など自然環境の破壊、歴史文化の消滅、米軍の自由飛行や陸上空母離発着訓練、いわゆるFCLPの殺人的な爆音、自衛隊による年間130日の航空機訓練が実施されるなど地元への影響は大きく、これは馬毛島や鹿児島県だけでなく日本全国の問題として捉えなければならないと話がありました。

平和・政治活動の意味

労働組合として平和運動と政治活動に取り組む意義についても話がありました。家庭や職場が笑顔で過ごせる場所であること、労働環境が整い、健康で文化的な生活ができる賃金が保証されていることが『平和の原点』であり、その権利は政治によって決められることから、切っても切り離せない問題だということで、組合の中で平和運動、政治活動に取り組む必要性を訴えられました。

住民の声が無視される

『基地交付金は10年、基地は永年』という言葉とともに、基地建設を進めていく中で、地元住民への説明・理解を得ることを国が無視していくことの怖さを感じました。

県本部女性部OGから「朝早くから抗議集会や夕方も街宣にでています。原爆投下、終戦と平和についてこれほど考える機会の多い8月に馬毛島では基地建設準備が淡々と進められています。私たちの願いと現実の違いに打ちのめされそうになりますが、心を強く持って頑張りたいと思っています。防衛省は、住民の理解を得たいといいながら、理解しえないようなことを行っています。説明会をしても、質問に対しても計画段階では答えられないとか、仮定の質問には答えないとか、まともな回答はありません。彼らの『理解』とは、我慢しろ！という意味に聞こえます。防衛省は住民の思いを無視して、基地建設に突き進んでいます。戦争への道を突き進んでいるとしか思えません。馬毛島のニュースは、全国では報道されていないため、ほとんどの国民が知らない、知らされていないと言ったほうがいいかもですね。でも、ネットで『馬毛島』を検索すると、多くの記事が出てきます。ぜひ馬毛島のことを知っていただき、馬毛島に基地ができてしまえば、日本がどうなってしまうのか、今一度平和について考えてもらいたいと思います。」と報告がありました。

自分ごととして

ロシアのウクライナ侵攻でもわかるように、有事の際には軍事施設や原発がまず最初に狙われます。鹿児島には、川内原発をはじめ、鹿屋基地もあります。

最も多くの基地がある沖縄も基地から派生する多くの問題や不安を抱えています。国政選挙や県知事選の結果を受けても、国は基地建設の姿勢を変えようとはしません。

どこの地域でも、住民の思いが無視し続けられています。事実を学び、政治に関心を持ち、自分事として一緒に反対の声を広げていきましょう。

福島の現状を学ぶ ～思いを話す～

福島

福島県女性部との交流

10月15日に、福島市で福島県女性部役員と本部常任委員とで現地交流会を行いました。役員の中には震災後に自ら希望し、双葉町役場で保健師として採用された大分県出身の方も参加されていました。また、自らも被災し、仕事をしながら心身ともに疲労困憊しメンタル疾患で病休となった方や、被災後に採用された方も参加されていました。

当時は、放射能汚染から退避するために、日々西へ西へ避難しなければならず、避難先は雪深い会津地方で寒さが身に堪えた、一週間シャワーを浴びられなかったことが最も辛かったなどが話されました。

福島県本部女性部でも東日本大震災当時の話や、震災後の福島県が抱える問題について意見交換をする機会や学習する機会がなかった、今後は東日本大震災や原発事故についてもっと学習する機会を持ちたいとの感想ももらいました。

生きることに精一杯

職員を含め現地住民の方々は、10年以上たった今も近隣町村で仮住まいを余儀なくされています。福祉事業を行うにしても、職員が車や電車で遠方の住民の元まで通い健康管理をしています。住民も職員もギリギリの環境で生きることに精一杯です。住民からのクレームを一身に受けた職員が押し寄せるストレスに耐え切れなくなりバランスを崩し、休職や退職に追い込まれるケースは少なくありませんでした。

県内での被災者差別

福島県内では、当たり前のように被災者差別があります。補助金や税などの免除を受けている被災者に対しやっかみを感じている人や、受け入れ先の町村の住民が、服装や車のナンバーで被災者を特定し、心無い言葉投げかけてくることもあります。

本来支払い義務がある税金等の減免が終了する時の住民からの苦情の想定は、さらに職員が追いつめられる原因になるとのことでした。

伝承館での学び

16日には、原子力災害伝承館で、災害当時のこと、除染、これからの福島について学びました。

伝承館のスタッフが、「安全だと思っていたから対策をしてこなかった」と言っていました。いろいろな場面で「想定外」という言葉を耳にしてきましたが、原発に限らず「想定外のことはあってはならない、もしもを考えて仕事もしないといけない」と、社会に訴えていかなければなりません。

大熊町の復興は道半ば

大熊町役場は、8年ぶりに本庁舎機能が町内に戻りました。現在、職員数は百人程度で、役場のすぐ側に遠距離通勤者も利用できる職員住宅があります。

大熊町は、帰還困難区域のうち、避難指示解除された地域と解除されていない地域があります。解除されていない地域は、今も立ち入ることができず放置せざるをえない民家や荒れた土地が広がっていました。

核と人類は共存できない

原発事故の悲惨さ、後世に及ぼす影響を考えれば、人類と核、原発が共存するのは困難です。

私たちが平和で安全に働き続けるために、引き続き学習し、取り組みを進めていきたいと思います。

政治は無関心でも無関係ではいられない ～政治にかかわるきっかけをつくろう～

北海道

ここ数年、私たちを取り巻く環境はめまぐるしく変化しています。私たちの生活、条例などは、どのように決まるのでしょうか。その一つが政治です。

道本部女性部では、働く女性の視点を大切にする政治を追求し、政治闘争の必要性を学習するため、毎年「女性政治学習会」を開催しています。今年は7月の参議院選挙における自治労組織内「鬼木まこと」さんの必勝にむけて取り組みを進めてきました。

「女性政治学習会」では、地方自治について学習を深めたほか、岸まきこ参議院議員から国政報告をうけ、職場で働く私たちが声をあげることが何よりも大切であることを学びました。また、社会と生活がリンクしているからこそ広い視野を持つことの重要性が話されました。あらためて、私たちは、「政治は無関心でも無関係ではいられない」こと、そして、現場の目線を持つ自治労組織内議員の役割の大きさを実感しました。

学習の機会と連動させながら、女性部幹事会を中心として「鬼木まことさん応援動画」の作成や総決起集会にむけた寄せ書きの取り組みをつうじて、身近な仲間から名前の浸透をはかりました。

しかし、各種取り組みを全体に広げきれなかったことは否めません。それでも、学習や取り組みに関わった仲間からは「組織内議員の必要性が理解できた」「応援したい」などの声がありました。日ごろから政治を身近に感じる学習機会や組織内議員との関りから、各級選挙闘争へとつなげていくことの大切さを再認識しました。

来年は統一自治体選挙の年です。国政の場だけでなく、各地域にも働く女性の声が届けられるよう、引き続き政治闘争の取り組みを進めていきます。